

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑭

浅田 朋子

幼稚園で子供の「誕生日会」をするなんて日本では聞いたこともないが、ここローマでは親が先生に許可をもらえば、お菓子やケーキを持ち込んでクラスメイトと教室で誕生日を祝うことができる。双子が通う幼稚園では、誕生日会の進行と盛り上げ役として「animatore」と呼ばれる人をパーティーイベント会社から幼稚園に派遣してもらう人も多い。彼らは道具を持ち込み、紙芝居や人形劇、クイズやゲームをして子供たちと一緒に遊ぶのである。

食中毒の危険のあるケーキやお菓子を持ちこみ、幼稚園を私的に活用するなどいいのだろうか・・とは思うのだが、幼稚園側は許可しており、ローマでは幼稚園での誕生日会は昔からよく行われている。ただ、昔はこんなに大掛かりなものではなく、親が手作りの焼き菓子を持っていく程度だったようだ。

しかし最近になって誕生日会での食べ物に関して、アレルギーや食中毒を考慮し「生クリームや生のものを使った食べ物の持ち込みは禁止。手作りは不許可で市販品のみ可。購入レシートと材料が明記されているものを提出してください」と張り紙が出ていた。それならもういっそのこと「食べ物の持ち込み禁止」にしたらいいのにと思うのだが・・。

しかし、このように規則があったとしても、黙認されていたり守られていなかったりすることもよくある。イタリアは「法律や規則はあっても、公然と

無視される状況にみんな慣れきってしまっている」国なのである。

これまで双子の誕生日は毎年、義父母宅で家族のみで祝ってきた。今回もそうしようと思っていた矢先に、同じマンションに住み同じく双子男児を持つママ友のレーナちゃんから「双子の誕生日会、幼稚園で一緒にやらない？」と電話がかかってきた。幼稚園での誕生日会は何かとリスクな気がしてならないので私は全くする気はなかった。「・・・」私が返答しないしていると、「面倒だから嫌なんですよ」と言われた。確かにそれも大いにある。「うーん、まあ、そやね」とやんわり断ろうとしていたのに、「大丈夫！私が全部段取りするから」と言い、電話はぶちっと切れた。

レーナちゃんはとても行動的でポジティブだ。思いついたらどんどん計画を進めるタイプである。そして頭もとってもいい。最近知ったことだが、大学は工学部で仕事は「ロボット開発」をしていたらしい。これを義父にいうと「ほら。やっぱり、スパイだよ！」と確信を深めていた。彼女の家の照明や電子機器は色々とカスタマイズされていて、前から誰がやったのかなど不思議に思っていたのである。

知らんぷりを決め込んで3日後、レーナちゃんから「企画書ができたから、家にきて」と声がかかった。その企画書は恐ろしいほど手間なことがてんこ盛りで、見ているだけでやる気がなくなるものだった。

まずはケーキ。巨大なウエディングケーキのようなデザイン。これはすぐに却下。「もっと簡単な焼き菓子とかスナック菓子でいいやん」というと、ししぶ承諾。

次は教室の飾り付けやライティング。教室入り口に設置する入場アーチはどうか諦めてもらった。子供が喜ぶのでイベントスタッフのお兄さんには来てもらうことにした。

でも極めつけは「誕生日ケーキを取り返せ！」というタイトルの動画を製作することだった。

ストーリーはこうだ。誕生日会当日「今から双子のママがケーキを持ってきてくれるよ」とイベントのお兄さんが言い、そのあとお兄さんのスマホに動画が送られて来る。動画は、私が幼稚園までケーキを運んでいるところに突然魔女が現れて、ケーキを奪い「返して欲しければ幼稚園の中を探すんだ！」と言いながら去っていく…というもの。お兄さんは「みんな、たいへんだ！ケーキが奪われた！幼稚園のどこかにケーキがあるはずだ。さあ探しにいけど。もしかしたら魔女が潜んでるかもしれないから、気をつけていこう！」と子供達をケーキ探しに連れ出し、最後はケーキを発見して、めでたしめでたし…という段取りだ。

「…なんかすごく面倒くさい…ビデオ撮るの？ほんまに？」。しかも幼稚園の前の道でこんなビデオ撮っているのを人に見られたら、とっても恥ずかしい。しかし彼女はもう魔女の衣装など購入済みである。

私の消極的な反対意見など、在イタリアロシア人特殊部隊を統率する司令官が聞くわけもなく、私の夫がカメラマン、レーナちゃんが魔女役で撮影は決行されることとなった。

撮影当日、夫とともにレーナちゃんの家に行くと、廊下の真ん中に巨大な誕生日ケーキがあった。高さ1.5メートル、ダンボールで三段に作られており、綺麗に飾り付けもされている。「…すごいな、これ」夫も驚くほど良くできている。とても段ボールでできているとは思えない。一主婦が作った工作レベルをはるかに超えた、もはや「作品」である。「もしかしてこれ動いたりするん…？」と思わず聞いた。すると「そんな時間なかったから…」と残念そう。じゃ、時間があつたらできたってことか…？

レーナちゃんは一生懸命、魔女のメイク中。

仕上がりは、これまた本物の老婆の魔女そのものである。シワやシミなんかも丁寧に描かれていて、黒髪のカツラと帽子を被ると、とても彼女とはわからない。

ロシアのやる気に押された日伊連合は勇気を振り絞り、幼稚園前で撮影を行った。「Dammi la torta!!」「Aiuto!!!」という声が静かな住宅街に響き渡った。夫の腕の悪さやレーナちゃんの細かな演技指導が入ったせいもあって、10テイクも撮影してようやく終了した。夫の貴重な休みはこの撮影で潰れ、撮影参加を逃げ切ったレーナちゃんのイタリア人の夫に対して、同じイタリア人でありながら断りきれないおのれの気の弱さを嘆いていた。



【レーナちゃん作 巨大誕生日ケーキ】

撮影に参加しなかったレーナちゃんの夫は、お菓子の発注を担当。話し合いの結果、イタリアの定番の焼き菓子の一つ「crostata クロスタータ」の小さいもの（通常は約25センチの円形。今回は6センチほど）を30個、レーナちゃんが作った段ボールのケーキに並べることになった。「crostata」はバター、卵、小麦粉でクッキーのよ

うな生地を作り、伸ばしたものをパイ型に敷き、その上にジャム(他にもヌテツラやリコッタ、フルーツ等)を流し入れたあと、1センチほどの幅にカットした生地をクロスさせてジャムの上にのせオーブンで焼くだけという、とても簡単で美味しい焼き菓子である。普通は家庭で作るものなので、パルや店で売っているものであっても材料費も手間もかからないので、とても安い。

ところが、レーナちゃんの夫が頼んだ *crostata alla marmellata* (ジャムのクrostタータ) を彼女と二人で取りに行き驚いた。なんと90ユーロもするのだ。普通なら40か50ユーロほどだ。確かに頼んだ店はちょっと高めの菓子店だ。でも、それにしても高すぎる…。私たちがレジ前で絶句していると、私たちの顔色を見た店員が「注文が特殊で…大きさやクロス部分の本数の指定がありましたので」と苦笑いしながら言った。

なんでそんな余計なことを…! クrostタータに細かな注文をするなんてあり得ない! レーナちゃんは無言でお金を払い、クrostタータを受け取った後、「このクrostタータの分、あの人に払ってもらうから」と怒りに満ちた声でつぶやいた。

家に戻りクrostタータをじっくり見てみた。確かに見た目は素晴らしい。クロス部分も規則正しく、ジャムの色も綺麗でずっしり入っている。しかし、このお菓子の味わいは素朴さにあるのに、それが完全になくなり、クrostタータのくせに「私が主役」みたいな間違っただ物感を出そうとする勘違い助演俳優みたいになってしまっている。

当日、12時に幼稚園に入り、子供達が昼食で食堂に行っている間に、様々な問題を乗り越え準備したものを持ち込み、段ボールのケーキを園庭の地下階段の下に隠した。お兄さんも到着し子供達と楽しく遊び始め、しばらくしてから例の動画の上映が始まった。

ところが予想以上に子供達は怖がり、泣き出す子もいる始末…。レーナちゃんの編集と効果音、画像のエフェクトが上手すぎて、B 級ホラー映画並みに怖い仕上がりになっている。もちろん残酷な描写などありはしないが、そもそもレーナちゃんの魔女がリアルで怖すぎるのだ。

「ちょっと…これは、5歳の子供には怖すぎですね…」とお兄さんも戸惑う始末。先生が意気消沈

する子供たちを励まし、どうにかケーキ発見までたどり着き、その後お兄さんの必死の盛り上げで子供たちは元気を取り戻し、ゲームなどして楽しみ、誕生日会は無事終了した。

あーやれやれと思って、次の日幼稚園に行くと、教室にいた子供達がかげよってきて「魔女に追いかけられた?」「今日は大丈夫だった?!」と聞いてくる。私は子供達の間で「魔女に襲われたかわいそうなママ」になっていた。

「うん、今日は大丈夫だったよ」と子供の頭を撫でた私の手をジーと見ていたキアラが「…この傷…どうしたの?」と、私の手の甲にある最近どこかでつけた傷を思いつめた表情で指差し、「魔女に、されたの…?」と真剣な表情で聞いてくる。「あー…うん、そうかも…」と言うと、「…やっぱり!!」と顔を引きつらせ走り去った。見ていた他の子供達も「きゃー!! 先生ー! ママに傷が! 魔女につけられた傷があるー!!」と騒ぎ出した。

その数日後、お迎えに来ていたキアラのママに会った時、「誕生日パーティ、とっても楽しかったらしいわ。ありがとう! でも、どんなゲームしたの? キアラね、魔女が怖くて、夜トイレに一人で行けなくなったんだけど…」と言われた。そのほかにも続々と魔女が怖いというトラウマ報告が寄せられた。レーナちゃんは「私、ホラー映画監督になろうかなあ」とケラケラ笑っていた。

そして、高級クrostタータは子供たちには不評で余ってしまい、義父母宅に持って行った。クrostタータを食べた義母は「これはクrostタータではないわねえ～」と言い、経緯を何も知らない義父は「こんなクrostタータ、イタリア人なら絶対に注文しないけどなあ!」と笑った。

(元当館語学受講生)

大衆か、エリートか

～分断と歩み寄りをめぐる議論～

深草 真由子

昨年の一月にラ・レップブリカ紙に掲載された *E ora le élite si mettano in gioco* (今度はエリートが勝負に出る番だ) は、作家アレッサンドロ・バリッコによるものというだけあってとても刺激的な文章で、大きな反響をよんだ。エリートはいったい何をしなければならぬというのだろう。

2018年の春に行われた総選挙に話はさかのぼる。過半数の議席を獲得する勢力はあらわれなかったが、もっとも多くの国民から支持を集めて第一党になった五つ星運動と、中道右派連合の中で大躍進した同盟が連立を組み、政権を担うことになった。



【同盟書記長マッテオ・サルヴィーニ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Matteo_Salvini

貧しい南部で絶大な支持を集めた五つ星と、北部同盟を前身とするだけあって北部で強い同盟。どちらもポピュリズム政党だと言われている。西ヨーロッパ初のポピュリズム政権の誕生に、たくさんの人々が拍手喝采を送っていた一方で、国の行く末を悲観する人たちも少なからずいて、イタリアが真っ二つに分断されてしまったかのようだった。バリッコの記事が出たのはそんなときのことだ。

記事は、その数ヶ月前に書店に並んだ、デジタル革命についての読みもの *The Game* を踏まえたものである。そこでバリッコは、五つ星運動にかんして、インターネットの世界から生まれたにもかかわらず、インターネットのパイオニアたちが夢見た新しく自由な世界の価値観とは相いれない側面も持っていること、そして、連立を組むことになった右派ポピュリズムと「エリートに対する、腸が煮えくり返るような憎悪」を共有していることを指摘していた (224～229 ページ)。

新聞記事の中でまずバリッコは、ポピュリズムの台頭について、大衆とエリートのあいだの合意——大衆がエリートに特権を与えるかわりに、エリートは大衆を正しい方向に導き、より良い社会をつくる責任を負うという合意——の崩壊に端を発すると言う。

「およそ二十年前にぐらつきはじめたそれは、今粉々に崩れかけている。そのスピードがより急速なのは、国民がより“利口な”(“怒っている”とも言う)ところ、たとえばイタリアだ。その国民はもはや医者や教師さえも信じていない。政治権力については最初、エリート嫌いの大富豪にそれを委ね (のちにアメリカ人が真似することになったトリックである)、そのあと、エリートとは関係のない男だと勘違いしてレンツィを試した。最後に合意をきっぱり破り、直接、権力を握りに行ったのだ」。

エリートとは医師、大学教師、実業家、政治家、弁護士、ジャーナリスト、アーティスト、聖職者、スタジアムで良い席に座る人の大半、家に五百冊以上の本を持っている人など、例を挙げればキリがないが、だいたいこういった種類の人たちのことだとバリッコは言う。彼らはたいてい勉強家で、

社会のためになる活動をしていて、育ちがよく、まじめで、理性的で、教養がある。親から譲り受けた財産もいくらかあるが、毎日働くことでまとまった収入を得ている。国を愛し、努力すれば報われる（“自分は努力したから報われたのだ”）と信じていて、文化を大切に、ルールを尊重する。

しかしながらエリートは、自分たちの信じるシステムが公平ではなく、弱者の犠牲の上に成り立っているという事実から目をそむけている。加えて彼らは、（*The Game*で考察されるように）これまで独占していた知識や情報やさまざまな特権をインターネットの普及によって手放さざるをえなくなった今でも、富のほぼすべてを牛耳っている。そんなエリートに対して、人々は積もり積もった怒りを爆発させた。EUや統一通貨ユーロへの懐疑論、それにワクチン反対論も、その根底にあるのはエリートへの憎しみである。



【EU、統一通貨ユーロ、NATO への反対を示す落書き】

出典：<https://it.wikipedia.org/wiki/Euro>

バリッコは言う。大衆は毎朝、報復のために目を覚ます。たいした能力もアイデアもない、ただ雄叫びをあげるだけのリーダーたちに率いられ、エリートの要塞をとり囲むと、皆でいっせいに怒声を発して、憎い敵を吊り上げる。彼らの武器は“素朴な知性”である。思索と洞察と洗練されたレトリックでもって身を守るエリートとやり合うのに、それがもっとも効果的なのだ。

単純で表層的なポピュリストたちの世界観は、人が何世紀もかけて正体を暴き、隅に追いやった“魔物”である。どうして今またそんなものに惑わされなくてははいけないのだろうか？もしそれに勝利を許せば、進歩のために費やされた歳月は無駄になってしまう。だから私たちエリートは今すぐ、

大衆の怒りがもっともなものであることを認め、自分たちの過ちを反省しよう。そして富を再分配し、新しい進歩と発展の形を探しだそう。教育に投資し、文化の力を信じよう。本を読みつづけよう。あまりに急いで取り壊してしまった“壁”をもう一度建て、すべての人が“壁”なしで暮らせるようになったときに、再びそれを取り除こう。大衆をファシスト呼ばわりするのを止め、深呼吸しよう。誰かを蔑んだり、何かに憤慨したりしながら生きてはいけないのだから……。



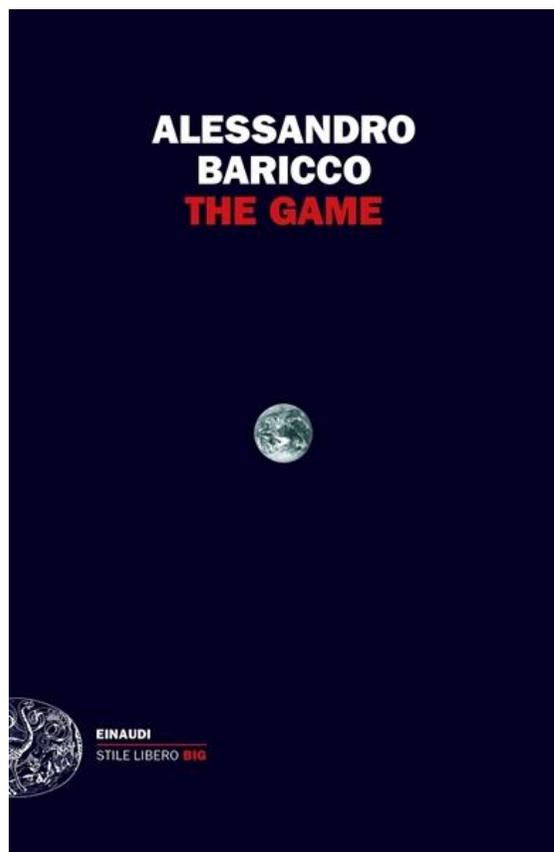
【アレックスandro・バリッコ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Alessandro_Baricco

おおよそ以上がバリッコの記事の内容である。ポピュリズムという現象について新たな視座を与えるようなものではないかもしれないが、読んだ者にいろいろなことを考えさせる、インパクトの強い文章であった。

この記事のあと、ラ・レップブリカの紙面では、政治学や社会学の専門家から寄せられたコメントが発表された。大衆の怒りを利用して権力を掌握しようとするポピュリストは民主主義を脅かす存在だという意見（Mounk）、アメリカやヨーロッパで起きていると言われるエリートと大衆の対

立は実際にはなく、作りあげられた“物語”にすぎないという意見 (Coccia)、社会はエリートと大衆の“合意”によってではなく、両者のあいだの“闘争”によって発展してきたのだという意見 (Mazzucato) などである。また、エリートか大衆か、というカテゴリーそのものに難があることを指摘する声もあった。なぜ月収二千ユーロに届か届かないかの高校教師がエリートで、それ以上に稼いでいるタクシー運転手が大衆なのか。交通費を自腹で払っていてもジャーナリストはエリートと見なされるのに、車も飛行機も公費で乗れる大臣が、自分は大衆側の人間だと言ってはばからないのは、いったいどうしてなのだろう (Serra)。



【THE GAME 表紙】

出典：<https://www.einaudi.it/catalogo-libri/problemi-contemporanei/the-game-alessandro-baricco-9788806246006/>

グスターヴォ・ザグレベルスキーが疑問視するのは、エリートを文化的で理性的な集団とし、大衆を野蛮で感情的な集団とする二項対立である。社会のピラミッドの上の方にいれば、その人はそ

れだけで教養があると言えるのだろうか。下の方にいる人は皆、エゴイストなのだろうか。エリートに良い面だけではなく悪い面があるように、大衆にも悪い面だけではなく良い面、たとえば助けあいの精神のような、エリートにはなかなか見出されない美徳があるではないか。そして誰もがエリートの性格と大衆の性格の両方を少しずつもっているものであり、その意味で誰もがエリートでありかつ大衆なのである。であれば、エリートの過ちも大衆の暴力も、その責任は皆が負うべきなのではないか.....。

五つ星と同盟の連立は結局、一年ほどで解消された。現在は同盟を中心とする右翼ポピュリズムが勢いを伸ばしている。エリートと大衆の歩み寄りの可能性を探る議論もむなしく、社会の分断はさらに進んでいるということかもしれない。

<参考文献・資料>

・Alessandro Baricco, *The Game*, Einaudi, 2018.

・レプブリカに掲載されたバリッコの記事とそれをめぐっての議論

https://rep.repubblica.it/pwa/longform/2019/01/17/news/alessandro_baricco_repubblica_dibattito_e_lite_popolo-216793834/ (Baricco, Mounk, Coccia, Mazzucato, Zagrebelsky)

https://rep.repubblica.it/pwa/rubrica/2019/01/15/news/l_amaca_di_michele_serra_16_01_2019_-216644168/ (Serra)

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>